小さいからこそできること。 人と人、島と都市をつなぐ読みもの。

Small Story in Kamijima

かみじま発 スモールストーリー

Jul. 2013
Vol.7

ママたち、縫い手メンバーと一緒に新作にとりかかる小澤先生（中央）。
先生のアイデアにみんな興味津々だ。

ひとりを大切にすること

「わぁ～！かわいい！！」。新作のおもちゃに、ママたちの歓声が湧く。隣の間では、子どもたちが手づくりの布おもちゃで遊んでいる。障がい者支援・子育て支援のボランティアグループ「ちゅうりっぷぐる～ぷ」の集まりは、いつも賑やかで和やかだ。

都市部に比べ、地域や親類とのつながりが強い田舎での子育ては、周囲のサポートを得やすい環境にある。しかし、島内でも核家族や共働き世帯など、家族のあり方や価値観の多様化に伴い、子育てを取り巻く環境も変化してきた。

だれにでもあてはまる、型にはまった支援ではなく、「たったひとり」を大切にする支援を行う『ちゅうりっぷぐる～ぷ』の代表小澤ヨシ子さんに、活動の原点や根底にある考え方についてお話をお伺いした。

お話をきかせてくれた人

ちゅうりっぷぐる～ぷ 代表

小澤ヨシ子さん

旧東予市出身。小学校教員を21年務めた後、退職。最後の勤務地であった弓削小学校には16年勤務し、今でも地域の方からは「小澤先生」と親しまれている。退職後、知的障がいをもつ義兄との関わりをきっかけに、因島の社会福祉法人「若葉」の活動に参加。1991年、ボランティアグループ「ちゅうりっぷぐる～ぷ」を立ち上げ、障がい者支援・子育て支援に取り組んでいる。家族は、夫と二人。好きな食べ物は甘いもの（自粛中）。自然が大好き。

※人口は、2013年6月30日現在の数値。
※出生数は、2012年1月1日～12月31日に弓削島で生まれた子どもの数。

子育て中のママ、障がい者の応援団

―ちゅうりっぷぐる～ぷは、どんなグループですか？

ちゅうりっぷぐる～ぷは、子育て中の方、および、障がいを持たれる方の応援ボランティアチームです。

子育て中のお母さんが、赤ちゃんや子どもたちと一緒に参加できること、参加する子どもたちがいろいろな世代の方に触れ合いながら、心豊かに過ごせることを大切にしています。

関わる人は、ママたち、子守ボランティア、縫い手ボランティア、障がいを持たれる方の移動補助ボランティアなど、総勢約35名に及びます。

現在の主な活動は、バリアフリーの保育遊具づくりで、月2回、集会所などに集まり、布絵本や布おもちゃづくりを行なっています。ママたちや縫うのが好きなメンバーは、制作担当。子どもが好きなメンバーは、子守担当。それぞれの「好き」を活かして活動しています。

遊具は、自分の子どものためだけに作るのではなく、地域の子どもたちみんなのために制作します。完成したものは、イベントで使用したり、せとうち交流館や保健センターなどに貸出し、地域のみんなに使ってもらえるようにしています。

子育て中のお母さんが、家の外に出て、子育ての悩みを共有したり、リフレッシュできる場をつくりたい。子育て中でも社会と関わりを持ち、社会貢献できる場をつくりたい。そんな思いからスタートし、約16年間続けています。1つの部屋を制作スペース、子守スペースに分け、お互いの様子が分かるなかで作業をするので、子どももお母さんも安心して参加できるんですよ。

また、毎年、障がい者福祉施設の「福祉まつり」にも参加し、バザーへの出店や移動補助のボランティアも行なっています。他にも、縫い物教室や読み聞かせの会の開催等、要望に合わせて流動的に活動しています。

地域のベテランお母さんたちが、子守ボランティアとして子どもを見てくれている間（手前）、ママたちは保育遊具づくりに励む（奥）。

ママの顔が見えるから、子どもも安心して遊べる。

ちゅうりっぷぐる～ぷの優しさが伝わってくるあたたかな空間。

子育てをしながら社会貢献

―自分の子どものためだけではなく、地域のために遊具を作るというのが面白いですね。発想はどこから？

平成6年に主任児童委員の設置が全国的に始まり、旧弓削町では私が担当させていただくことになりました。安心して子育てをできる地域になるよう、遊び場の安全点検などに取り組んでいました。

主任児童委員をするなかで、「島で子育てをしてよかった！たのしかった！とママたちが思える地域にしたい」という気持ちが強くなりました。特に、転勤などで島に引っ越して来られた方が安心して子育てできるということが、地域全体の魅力を上げていくことに繋がるのではないかと思ったんです。家の中で子どもと二人きりでは息が詰まって当然です。島内でも核家族が増えてきていたこともあり、ママたちが外に出られる場づくりが必要だと感じました。

けれども、子どもを預けて、趣味の縫い物をしている集まりにしてしまっては、周りの理解を得られないと思いました。特にお姑さんがいるとことかはね（笑）。地域の子どもみんなが使える遊具を作ることで、地域の方からも「あんたら、ええのつくったね～」と褒め、認めてもらえますし、ママたちと地域のつながりも作れると思いました。

先生のアイデアに興味津々のママたち。縫い物に集中することがママたちの気分転換にもなる。

布おもちゃ。野菜や果物の裏には、マジックテープがついており、取り外しできるようになっている。楽しみながら、数や食べ物の名前を学ぶことができるようになっている。

障がいをもった義兄と

―そもそも、どういうきっかけで活動を始められたのですか？

主人の兄が、知的障害をもっていました。義母と義兄は、みかん山に行くのが習慣でしたが、それ以外は、家の中で雑誌の写真を見て過ごすという生活をしていました。

教員を退職した後、そんな二人の様子を見て、「義兄と楽しく、家族として暮らしたい」という思いが強くなりました。

「義母にべったりの義兄が、義母を失ったら、生きる気力を失ってしまうのではないか。私も、義兄と、義母以上に仲良くなりたい！」そう思ったのが、欲張りの始まりでした（笑）。そうして、保護者として、義兄と一緒に因島の「であいの家」（知的障害者共同作業所）に通うようになったのです。

やがて、その作業所が「因島であいの家」として正式に認可を受け、開所することになりました。そこで、開所記念に、作業所で作った「ちゅうりっぷのぬいぐるみ」を来賓の方にお渡しすることになったんです。私は、保護者として、約200本のちゅうりっぷづくりを手伝うことになりました。時間がないので、作業所に通うフェリーの中でも縫っていたら、PTAでお世話になった方などが、「何しよんの？」と寄って来てくれました。うちの義兄のことはみんな知っているので事情を話すと、「そがな、たどたどしい手で間に合うわけないやろ！貸しなさい！！」といって、手伝ってくれることになったんです。こうして、8名の方が集まってくれました。

それから、毎晩わが家に集まって、おしゃべりしながら縫い物をしました。それが、楽しくて。であいの家では、年2回、「福祉まつり」というイベントがあるのですが、そのバザーに出品してくれないかという話もあったので、そのままそのメンバーに手伝ってもらうことになりました。

こうして、障がい者福祉施設の支援活動チームとして、平成3年、ちゅうりっぷぐる～ぷは誕生しました。

バリアフリーの遊具をつくる

―障がい者支援が始まりだったんですね。そこから、子育て支援にも取り組むようになったのは、どんなきっかけから？

平成8年、旧弓削町の社会福祉協議会主催で「ボランティア養成講座」というものが開かれることになりました。ちょうど全国的に「ボランティア」という言葉が盛んに叫ばれていた時代だったんだと思います。旧弓削町では、「朗読」、「手話」、「保育遊具づくり」の講座を開くことになりました。

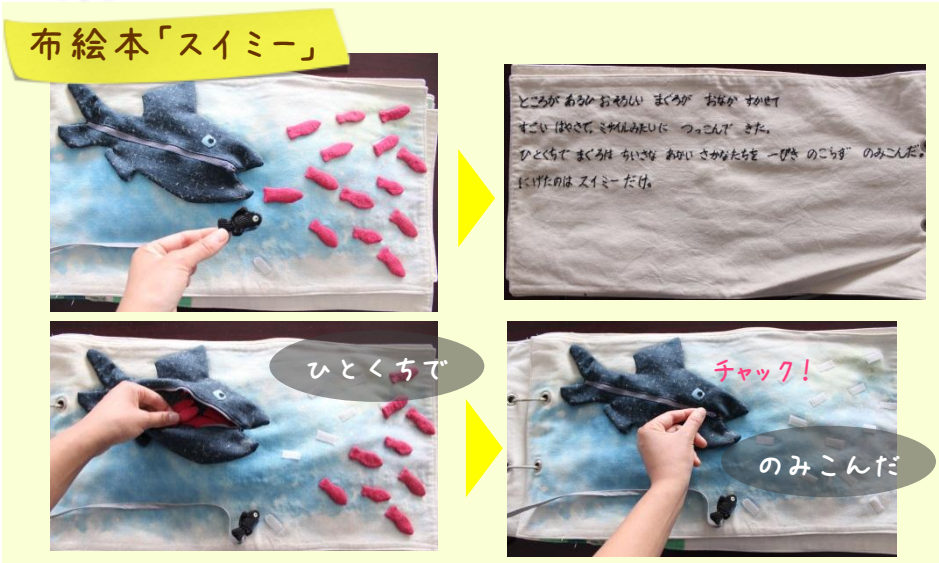
ちゅうりっぷぐる～ぷで作っていたぬいぐるみが縁となって、「保育遊具づくり」の講師を私が努めさせて頂くことになりました。内容はこちらで決めてよいとのことでしたので、バリアフリーの遊具づくりを提案させてもらったのです。ハンディを持っているお子さんも「共に遊ぶことができる」遊具を作るということを核にしました。その一つが布絵本でした。

布絵本の魅力

絵本には、子どもを心豊かに、想像力のある子に育てる力があります。子どもにはいっぱい本を読んであげたい、読み聞かせをしてあげたいというのは、教員時代からの願いでした。

しかし、ハンディのある子にとっては、言葉の概念が伝わりにくいこともあります。その子にとっては、意味の分からないところがいっぱいあって楽しめないということもあるのです。なぜみんなが笑っているのかが分からない。みんなと違うところで笑うから、奇異な目で見られてしまう。

それが、布絵本であれば、操作を通じて意味が分かるんですね。たとえば、絵本『スイミー』で、ちいさな魚たちがまぐろにひとくちで飲み込まれるシーンがありますが、「ひとくちで」という部分が、こうして操作することによって、とても分かりやすくなるのです（左）。そうすると、どんどん意味が分かって面白くなってくる。だから、バリアフリーの布絵本で、絵本の喜びを伝えられたらと思いました。こうして、子育て支援へとシフトして行きましたが、根底にあるのは、「バリアフリー」の気持ちなんです。



操作を通じて、言葉の概念を理解することができ、同時にファスナーの開け閉めを身につけることもできるという優れもの。

子どもが「群れ遊ぶ」場を

その後1年間、みんなで作ったらまあまあたくさんの遊具ができました。「これだけ作って、ちゅうりっぷのメンバーの赤ちゃんが遊ぶだけじゃもったいないね。地域のあかちゃんみんなに遊んでもらいたいね」という話になって、平成9年、『おもちゃ＆えほんらんど』を開くことにしました。

当時、少子社会を迎え、子どもがひとり、ふたりしかいないという集落もできていました。子どもが「群れ遊ぶ」ためには、親が車で連れて行ってあげないと、遊べないという島になってしまったのです。私たちが子育てをしていた時期とは大違いです。

「子どもが群れて遊べる場、世代交流ができる場が大切だ」という思いもあって、『おもちゃ＆えほんらんど』を開くことになりました。『おもちゃ＆えほんらんど』の活動は約7年間続けました。その後、少し形を変えて、月1回の『おはなし会』として約9年活動しましたが、昨年から希望制にしています。また、年1～2回、体験手芸教室を開催し、そこでも読み聞かせを行なっています。

家族以外の人との関わりから、子どもが得るものも大きい。

せとうち交流館に常設されているジャンボトイマップ。高さ4メートル 幅8メートル。

もうひとつのしまなみ海道

―せとうち交流館に展示されているジャンボマップもみなさんが作られたんですよね。

これも、様々な出会いに恵まれてできたものなんです。しまなみ海道開通を記念して、しまなみ海道でつながった尾道から今治までの海道沿線の20市町村のボランティアを中心に、約250名の方が携わり、約5ヶ月をかけて制作されました。

高さ4メートル×幅8メートルの大きさがあり、体育館などの広い床に広げて、この上を歩くこともできます。それぞれの地域、島は取り外しができ、地理に慣れ親しめるようにパズル式になっています。魚や鳥などのパーツも取り外すことができ、裏には名前が書いてありますので、触れながら名前を覚えることができるようになっています。

地域の子どもも大人も、障がいを持たれる方も高齢の方も、発見と驚きある「学び」として、活用し遊んでいただける遊具を目指して制作しました。魚は、特徴を捉えるために美術の先生に水彩画にしてもらい、宮窪(漁業が盛んな地域)チームが刺繍糸やスパンコールを使って原画に近いサンプルを作りました。ただし、鯛だけは、鯛漁で有名な魚島のチームが担当しました。魚の群れは、「西流最強前」という実際の潮流に基いて並べてあるんですよ。また、鳥についても、野鳥の会の方にご協力いただき、しまなみ海道を往来する野鳥(サシバとハチクマ)を実際の飛来ルートに基づき並べています。

それぞれの地域の方が、自分の地域を担当し、好きなようにアピールしています。地図づくりをするためには、いい加減に地域を見ていたのでは作れないんですよね。そこの歴史や名所・旧跡を見直し、自分の地域を誇りに思うようになる。そういう副産物もありました。

(左)美術の先生が描いた水彩画と実際のパーツ。どちらも秀逸。上から、鯛、黒鯛、メバル、ベラ、フグ。
(上)パーツがバラバラにならないように、貼り付け場所にはボタンで目印をするという工夫。保育遊具づくりで培ったノウハウが生かされている。

出会いが運んでくれるもの

私は、本当に幸せだと思うんです。布絵本を始め、全国で第一人者と言われる方々と自然に巡り会うことができたんです。必要なときに、必要な方に出会うことができて、ここまでやってくることができました。

私って、夢は大きいけど、能力的に全部中途半端。これだけは自信持って言えます（笑）。歌ったらみんながオンチになりそう、運動もダメ。じゃけん、ハンディキャップがある子どもたちにとても親しみを覚えるの。自分がそうだから。でも、「補え合える」ということが、共に暮らすということの意味だと思うんです。

こうして、多くの方々の出会いの中で様々な活動のきっかけをもらいました。そして、活動が広がっていきました。こんなこと言うと偉そうだけど、ボランティアって人のためじゃないんです。ちゅうりっぷぐる～ぷがあることで、私が社会参画の場を「いただいて」いるんです。読み聞かせをして喜んで聞いてくれる子どもの笑顔、縫わしてもろうたものを喜んでくれる子どもの笑顔が、何よりのご褒美なの。

地域イベントで保育遊具や手づくりケーキを出展するメンバー。世代、関わり方も多様なのが魅力。

ボランティアは、自分が好きなことや慣れていることでないと続かないかなと思います。ちゅうりっぷは、子守りもあるし、福祉施設の通所者の方と触れ合ったり、子どもが喜ぶおもちゃをつくるなど、様々な関わり方があります。だから、メンバーは固定ではないんです。「私はグループには入ってないけど、手伝ってるよ」という人が多いんですよ。活動内容も、メンバーも、時々に合わせて流動的に「バリアフリー」なのがちゅうりっぷぐる～ぷなのです。

たったひとりはみんなの代表

―先生のお話をうかがっていると、「社会」や「人」の捉え方が、独特だなと思うのですが。

「ひとりを大切にしよう」ということが出発点です。その時期その時期に、今はこの子を応援したいという「核」になる子がいます。その子が必要なものは何なのだろう？その子を取り巻くつながりの輪を作るために、みんなに望まれることは何だろう？そう考えます。もちろん、それは言葉では言いませんけれど。

たったひとりを大切にすることが、すべてのレベルを上げることになります。その「ひとり」は、ただの「ひとり」ではないんです。その人の困りごとは、その人が「代表」してくれている不都合さなのですから。

赤ちゃんにも、「意思」はある。「みんな」ではなく、「たったひとり」を大切にするちゅうりっぷぐる～ぷの子守り。

これからのこと

町の状況もだいぶ変わってきました。育児教室も盛んになり、保育所も場合によっては0歳から預かってくれるようになりました。地域や家族との付き合いも程よい距離感でできているように感じましたし、ちゅうりっぷぐる～ぷは、発展的解消ということにしましょうという話になっていたんです。

ここ数年は、自分の体調不良もあり、宣伝しないようにしてたんです。でも、今年は口コミで希望者がいてまた始めることになりました。ニーズはあるかもしれません。でも、ボランティアの数が少ないので、大々的に宣伝をすることは考えていません。思ったことができなくなってしまうからです。一番恐れるのは、針を使うので、そこで事故が起こってしまうことです。子どもに何かがあっては、悔やんでも悔やみきれませんから。今の自分の体力で守りきれる子どもの人数でやっています。

針が生命だから

針が生命なんです。ミシンでバーっと縫うのではなくて、一針一針、自分の意志でどこに針を刺すか、どこに進むのかを決めていく。何を縫っているのか。誰のために縫っているのか。赤ちゃんの笑顔を今のまま成長させてあげたいという気持ちで、一針を通す。そして、こうして「縫わせてもらえること」に、感謝の気持ちを込めて針を通す。その一針が大切なの。だけど、そうやって愛を育むことができる針だけれど、もし体内に入ったら取り返しがつきません。だから、自分が子どもを守れる体力がある限りしかしないと決めています。

若い世代をあたたかく見守るばあやに

ちゅうりっぷぐる～ぷを引き継ぐ人を見つけなきゃいけませんよって、みなさんによく言われるんです。でも、それは必要ないことだと思っています。私がしてきたことは、その時私ができそうなことで、何人かに協力を問いかけみて、偶然まとまった形なんです。

次の人がもしいるとしたら、その人がその時に、「子育てをどんな面から応援したらいいだろう」という風に考えて、これまでの私たちの経緯とかは無関係に、「その時期に合ったこと」を突き進んで欲しいの。私は、ばあやになって目を細めて、「よう、がんばってるね」って言ってあげたいと思うんです。

ちゅうりっぷぐる～ぷには、そういう「ばあや」のお手本がいます。来年と再来年に88歳を迎える佐島ちゅうりっぷのみなさんです。子どもたちに、お手玉などの昔あそびを教えてほしいとお願いしたことをきっかけに、今も、布絵本づくりやイベント時の食事づくりを手伝ってくれています。

私は、夢を描くバクなんです。アイデアは思い浮かんでも、技量が足りないところがいっぱいあります。そんな私をおだてたり、励ましたりして、ずっと支えてくださったのが、佐島のばあやたちです。人を喜ばせたり、もてなしたりするのが大好きで、「歳をとっても、役立たせてくれてありがとう」と言ってくれる、本当に素晴らしい方々なんです。私もこうなりたいと思っています。

スイミーの精神で

『スイミー』の絵本で大好きなシーンがあります。まぐろを恐れて、怖がって岩陰に隠れて出てこないきょうだいたちに、「いつまでもそこに　じっと　してる　わけには　いかないよ。なんとか　かんがえちゃくちゃ。」とスイミーが言うところです。なんでもくじけちゃいけない。何か方法があるはず。いくら島でも、いろいろな施設がなくても、自分らに合うものをここで作ればいいんじゃないかと思うんです。人には言ったことないけど、自分の中でのちゅうりっぷぐる～ぷのテーマなんです。

佐島ちゅうりっぷのメンバー。製作中のペンギン親子のおもちゃと一緒に。

編集後記

島の「幻想」をやわらかくくずせ

大変お待たせいたしました。今回のスモールストーリーはいかがでしたでしょうか？

島の子どもたちは「地域」で育ちます。お母さんのお腹の中にいるときから、会う人みんなにたくさんの声をかけてもらいます。生まれてきた赤ちゃんは、島のアイドルです。どこへ行っても可愛がってもらえて、言葉を覚えればみんなが喜んでくれます。学校に入ると、祭りやボランティア活動で、子どもにも地域の中の仕事が与えられ、社会の一員としての意識が養われていきます。

そんな理想的な島の子育て環境。誤解を恐れずにいえば、それはやはり理想にすぎないかもしれません。

例えば、「移住者」である私。もしここで子どもを生んだら、子育てを手伝ってくれる家族は近くにはいません。子育ての悩みを相談しあう、同級生もここにはいません。例えば、運動部中心の島文化で、運動が大嫌いな子。その子の輝ける場所はここにあるでしょうか。

島の暮らしは、豊かで平和です。けれども、そこには「幻想」もあります。どんな場所でもそうであるように、小さな島のなかにも、「多様性」があります。障がい者、移住者、外国人といった『分類』から、運動の苦手な人、アイドルオタク、緊張しいの人といった『個性』まで。島は平和で仲良しというある意味での「幻想」を、素知らぬ顔してやわらかくずらしていく。それがちゅうりっぷぐる～ぷなのです。

取材のなかで、ちゅうりっぷぐる～ぷのみなさんが、「相手に合わせる」ことを大切にして活動している場面をよく目にしました。そして、「たったひとり」を尊重するということも。どちらも言葉で言うのは容易いことですが、実行するのは本当に難しいことです。例えば、車に乗れず、活動場所まで来れない方がいれば、その方が歩いて来れる場所に、みんなの拠点を移せばいいという発想になります。できる人が動けばいいのです。小さなことですが、そこにもポリシーを持って行動されている点が、素晴らしいなと思うのです。そんなちゅうりっぷぐる～ぷのみなさんに、たくさん勉強させていただく取材でした。

click 本誌のコンセプト

『スモールストーリー』が読める場所

【紙で読む】弓削総合支所、弓削港、せとうち交流館、弓削商船図書館・寮、弓削高校図書室、弓削中学校、しまでカフェ、やよみ亭、立石港、岩城港、岩城中学校、よし正、魚島総合支所、愛媛県県立図書館
【ネットで読む】上島町島おこし協力隊のブログ　http://setouchi-k.town.kamijima.ehime.jp/blog/sima/

About ME

文と写真と編集
ふじまき　みつか　（まっきー）

1983年山梨県生まれ。A型。ふたご座。国際基督教大学卒業。山梨→東小金井→フィンランド→吉祥寺→上島町生名

都内マーケティング会社に勤務ののち、2011年10月より、愛媛県越智郡上島町（人口約7600人）の離島に移住。島おこし協力隊として活動中。

最近のお気に入りごはん。
自家製野菜のラタトゥイユ（贅沢！）、ズッキーニとなすのソテー、
相模半白キュウリそのまま、水茄子のおかか和え、
長野県木曽町の天然酵母パン、Happy Island Curryのカレー

click いいね！してください facebook

協力隊の日々をチェック blog

かみじまのことば

ほうじゃろ

【意味】　そうでしょ

【用例】
「母ちゃんの言った通り、雨に降られよったわ。」
「ほうじゃろ。じゃけん、傘もってけって言ったんよ。」
（お母さんが言った通り、雨に降られてしまいました。
そうでしょ。だから傘持っていけって言ったのよ。）

How do you think?
ご感想お聞かせください。
メール：fujimaki-mitsuka@town.kamijima.ehime.jp